

## 仙台の文化を支えた広瀬川

### －伊達政宗・田山利三郎・前川國男の視点－

街中をゆるやかに流れる広瀬川、仙台市はこの川を中心として発展してきた。広瀬川は奥羽山脈にその端を発し、途中多くの支流を従えて宮城野海岸平野(仙台平野)で名取川と合流して太平洋に注ぐ。その間に兩岸に河岸段丘を形成し、仙台市街地では蛇行を繰り返している。また、青葉山を流れていた小川は、広瀬川の蛇行による河川の争奪によって滝を生じ、竜の口峡谷を形成した。

**仙台の大地** 仙台市とそれを取り囲む丘陵地帯は、巨大なカルデラの活動の産物、そしてその後、今からおよそ 800 万年前に活動した仙台の土台ともいべき「三滝玄武岩」からなる。その後、およそ 500 万年前には寒流系の浅い「竜の口の海」が太平洋から今の北上川に沿った地域に生じた。この海に堆積したのが化石の多産で知られる「竜の口層」であり、さらに 370 万年前には巨大なカルデラの活動による火砕流堆積物「広瀬川凝灰岩部層」があたり一面を覆った。この頃は、浅い海や三角州のような場所にセコイヤの類が繁茂し、火山活動もたびたび起こった。再び海となって海成層が堆積した。その後、地球全体に影響を与えた氷期と間氷期の繰り返しによって海水面が変化し、河岸段丘を生じた。今からおよそ 2 万年前から地球は次第に暖かくなり、極地域の氷が融けて海水面が上昇し、6～7 千年前には仙台付近では今より 5 m ほども高くなり、海岸線はずっと奥まで遡った。仙台付近では、この時期に形成された宮城野海岸平野と丘陵・段丘地域の地形とが「長町－利府断層」によって明瞭に区別される。このような長い歴史によって積み重ねられた地層が仙台を中心とした地域に分布する。広瀬川によって浸食された八幡町、川内、西公園、経ヶ峯、竜の口峡谷などの崖のいたるところにこれらの地層はみられる。そして、その上に河岸段丘礫層が覆っている。

**伊達政宗** この広瀬川によって形成された段丘・蛇行・竜の口の地形に目を付けたのは伊達政宗、巷間言われているように地形を巧みに利用した武将ともいわれる。ゆるやかに形成されたいくつかの段丘面、市内を気を付けて歩けば、この段丘面の境は坂道になっており、古くから発展した仙台市街地はこの段丘面の上にある。また、仙台城を守る自然の要害としての機能を果たす竜の口の深い峡谷がある。西側は青葉山の丘陵地帯で、御裏林が控えている。政宗はここに築城するとともに治水の意味もあって川村孫兵衛に命じて、市内に四ツ谷用水を張り巡らせた。総延 44 キロメートルにおよぶこの用水は田畑を潤し、市民の生活用水となった。明治以降、この用水の大部分は地下に埋設されてしまったが、今でもところどころにその面影をとどめている。仙台城の石垣には「三滝玄武岩」が用いられている。

**田山利三郎** この広瀬川の兩岸に発達する河岸段丘と竜の口峡谷の成因を最初に研究したのは、田山利三郎(1897-1952)であることはあまり知られていない。田山は

宮城県村田町の出身で、宮城県師範学校卒業後小学校訓導となったが、その後東京師範学校を経て各地の中学校・師範学校訓導を務めた後に学問への道を捨て難く、東北帝大で矢部長克門下となり、地質学を修め30歳で卒業した。その時の調査研究により仙台の河岸段丘を台原・仙台上町(かみまち)・仙台中町(なかまち)・仙台下町(しもまち)に分類した。私たちが、今、何気なく用いている段丘の名前はこの田山による。その後、海洋地質学の先駆者として南太平洋に点在する島々の研究に従事した。田山の業績のうちで特筆すべきは、現在の北太平洋に「天皇海山」として知られる海底地形を初めて明らかにし「北太平洋海嶺」と名付けたことであり、後にアメリカのR.S.ディーツによって世界に広められた。田山は、現在の地球の歴史を支配する運動としてのプレートテクトニクス理論の先駆けとなる研究を行ったのである。残念なことに、田山は終戦直後の1952年9月、伊豆・小笠原諸島にある明神礁海底噴火の調査中に殉職した。

**前川國男** 今、問題となっている宮城県美術館の設計・建設に関わった前川國男もこの広瀬川に発達する河岸段丘と強固な地盤に目をつけたに違いない。川内の一角に構えるこの美術館は広瀬川の醸し出すこのような歴史や自然に溶け込んで佇む。前川は「美術や芸術は本来、人間の日常茶飯事から発展してきたもので、その美しい物、優れた物を集めている美術館は人生そのものに直結している大事なものだと考えている」と言う。先の東北太平洋沖地震でも「宮城県美術館は設計段階に宮城県沖地震(1978年)が発生したため、構造設計を見直し耐震強度を向上させた経緯がある。また美術館自体が強固な地盤に立地していたことも被害が小さかった要因の一つである」との報告がある(宮城県美術館HP)。

河岸段丘の下の新第三紀層は地盤も安定している。この安定した地盤と、広瀬川が長い時間をかけて創りだした段丘・蛇行など、この自然の景観は人々の憩いの場所となり、文化の中核としての役割を果たし続けている。現在の仙台の文化を象徴する東北大学、宮城県美術館、仙台市博物館、国際センター、その他の文教施設などはこの河岸段丘とは切っても切れない関係にある。私たちは、この三人の先達の想いに立ち返って、宮城県美術館の永久保存を考えるべきであろう。

蟹澤聰史(2020年11月21日)

追記 村井宮城県知事は、11月16日「県美は現地保存へ」と方向転換を表明しました。このことは、ここにお集まりの県美ネットの皆様や東北大学の先生方の運動の成果であり、敬意と感謝を申し上げます。また、県民の皆様や全国の多くの方々が「文化遺産の保存」に深い関心を持たれたことの大きな成果です。今の世の中は、多くの問題を抱えていますが、この宮城方式ともいべき運動が、新しい市民運動のひとつの形になるであろうと思います。今後は、如何に魅力のある自分たちの美術館にすべきかを真剣に考えていくべきでしょう(11月17日)。